

スポーツ・教育振興調査特別委員会会議記録

スポーツ・教育振興調査特別委員会委員長 名須川 晋

- 1 日時
平成 29 年 8 月 2 日（水曜日）
午前 10 時 1 分開会、午前 11 時 55 分散会
- 2 場所
第 4 委員会室
- 3 出席委員
名須川晋委員長、千葉絢子副委員長、郷右近浩委員、高橋但馬委員、
菅野ひろのり委員、樋下正信委員、佐々木茂光委員、城内よしひこ委員、佐々木努委員、
中平均委員、吉田敬子委員、白澤勉委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
工藤担当書記、古屋敷担当書記
- 6 説明のため出席した者
文化スポーツ部 スポーツ振興課 競技スポーツ部（青山駐在）
主査スポーツ振興専門員 塚田 美和子 氏
- 7 一般傍聴者
2 名
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
「息の長い選手に・・・」
 - (2) その他
次回の委員会運営について

9 議事の内容

○名須川晋委員長 ただいまからスポーツ・教育振興調査特別委員会を開会いたします。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております資料のとおり調査を行いたいと思います。講師として、岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課、塚田美和子様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

○塚田美和子参考人 塚田と申します。本日はよろしく願いいたします。

○名須川晋委員長 塚田様の御略歴等につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、「息の長い選手に・・・」と題しまして、競歩でリオデジャネイロオリンピック

に出場した高橋英輝選手を指導された御経験から、トップアスリートを育成するための詳しいお話をいただくこととしております。

塚田様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演を快くお引き受けいただきましたことに改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど塚田様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、塚田様、よろしく願いいたします。

○塚田美和子参考人 ただいま御紹介にあずかりました、岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課で勤務させていただいております塚田と申します。本日はよろしく願いいたします。

とはいえども、私、教員なもので、座ってお話するのはどうしてもちょっと苦手なもので、今日は立ったままでお話をさせていただきたいと、ちょっと前のほうに出させていただきますが、よろしく願いしたい思います。

本日のテーマ、「息の長い選手に・・・」にということで、トップアスリート育成について、経験談ということでお話をお受けしたわけなのですが、実のところを言うと、本当は高橋英輝に来たお話でありまして、今日もちょうど岩手日報のほうに記事が載っておりますけれども、8月4日からロンドンで開催されます世界陸上に出場することが決まっております、ちょうど今日ロンドンのほうに着いたということで、彼と一緒に過ごした時間を皆様と少し共有させていただければなと思いますので、皆様のお役に立つ話になるかどうかは、私もなかなか不慣れなもので難しいのですが、精いっぱい務めさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、始めていきたいと思えます。私についてということなのですが、私自身も実は陸上の競歩をやっておりました。始めたのは、高校2年生の春から競歩を専門として始めました。陸上競技を専門としましたのは、高校1年生からでした。それまでは幼少期、実は私は肥満でして、驚いていただいてありがとうございます。小学校4年生のころにミニバスケットが地域に発足しまして、私自身がやりたいと言ったわけではなく、近所の友達のお母さんがやせるために始めてみたらという勧めで、ミニバスケットを始めました。

そこから私の運動歴が始まっていくのですけれども、その後ミニバスケットの練習が非常に苦しくて、中学校に入るときに部活を選択するということになるのですが、運動部には入りたいなと思っておりまして、ちょうど二つ上に姉がおりましたので、姉が入ってありましたソフトボール部に部活を選ぶことになりました。ミニバスケットはそこで終わり。それからソフトボールということで、ソフトボールを一生懸命練習してまして、何とか地域で勝って、県大会には出られるチームではありました。私の守備は、2番バッターで、セカンド、ショートが担当でした。その中の練習で、ロードワークをやっていたら体が絞れてきてまして、そうしているうちに長距離走が若干速くなってきたということで、中学校の時代に駅伝を取り組むようになりました。

高校は、盛岡三高に進んだのですけれども、本当はソフト部に入ろうと思って行ったのですが、ちゃんと調べてから行けばよかったですけれども、そこにはソフト部がないということに入学してから気づきまして、そこで長距離をやった経験から、では長距離をやろうかということで長距離を始めました。

ちんたらちんたら走っておりましたので、素質もなかったもので、県大会にやっと出られるかぐらいの選手で、3,000メートルを走っておりました。そうしたところ、高校2年生に上がる春合宿のときに、そのときの顧問の先生が陸上部の長距離全員に競歩をさせてみました。そこで、たまたますぐに形になったのが私で、「おまえ、もしかしたら全国に行けるかもしれないよ」といった言葉に、県大会しか知らなかった私は、単純に全国大会に行ってみたいなという、そういう安易、安直な気持ちで競歩を選択し、そこから競歩の競技歴が始まっていくわけです。

そうこうしているうちに、高校2年生のときに福岡国体に出たのですけれども、初めて出たのですが、6位に入賞することができまして、そのときに入賞したら、もうすぐに来年は優勝したいというふうな気持ちに切りかわった自分がいたのに気づきました。そうこうしていくうちに、このような形で競技を進めていったわけです。

国体もこれまで11回出場しまして、10回連続入賞させていただいて、入賞が途切れた11回目の国体のときに、もういいかなと思って引退を決意しまして、30歳まで競技を続けさせていただきまして。国体も、自分で言うのもなんですが、生涯獲得点40点ということで、去年国体に出られたらなと思ったのですが、11回も出たのに一回も地元国体に巡り合わせられなかったというのは、やっぱりこれは運なのかなというふうに思っております。

職なのですが、そこに書いているとおり、平成8年4月に高校の保健体育教諭としまして採用になりました。このように勤務歴を経まして、平成19年から花巻北高校のほうに勤務させていただきまして、そこで高橋英輝と出会うというふうなことになっています。

また、平成25年からは、去年までありました岩手県教育委員会スポーツ健康課に勤務させていただきまして、国体強化担当としまして、自分が出なかったのですが、競技団体に頑張れ、頑張れと言う役で国体に携わらせていただきました。そして、今年からスポーツ振興課で勤務させていただいております。

また、その他なのですけれども、平成24年度から中央競技団体、日本陸上競技連盟の強化育成部競歩の担当としまして、ジュニアを中心に日本全国の子供たち、トップの人たちと活動させていただいて、海外遠征等々にも帯同させていただいております。

この役職は、強化育成部になりますと、自動的に日本オリンピック委員会強化スタッフとしまして、今陸上競技競歩のほうのコーチングスタッフとして活動させていただくということになります。

今の所属はスポーツ振興課ですけれども、本日は元花巻北高校教諭、そしてこの日本陸上競技連盟協会育成部員としての立場でお話をさせていただきたいなと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

本日の内容なのですけれども、結論づくところなのですが、本県で32年ぶり、男子では初の陸上競技のオリンピック、高橋英輝が誕生するまでということで、どのようにして高橋英輝が高校時代から競歩を始めて、次につながっていったかという経験談でしかないのですが、そういったお話と、あとはその経験談をもとに、日本陸上競技連盟協会育成部員としましていろんな研修を受けております。トップアスリートを育成、強化していくためには、どのようなことが必要なのか。これは、私、研究職でもないですので、持論の展開になるかと思いますが、そういったことについてお話をさせていただきたいと思っております。

早速内容に入りますけれども、私の陸上競技の指導者としての指導方針なのですが、これです。本日のタイトルにもなっておりますが、「息の長い選手に・・・」をモットーに指導させていただいております。これは、実は私自身が競歩、陸上を始めて15年やったわけなのですが、15年間続けたから国体に11回出られたとか、続けていったから広がるネットワークだったりだとか、見えなかった世界、ステージが上がって、次のステージが見えたりした喜び、そういうものが自分自身すごく印象に残っていたので、その経験を、そのことをやっぱり携わった選手、生徒たちに教えたいなということで、息の長い選手をモットーに指導しております。例えばインターハイに出したいだとか、1番をとらせたいという、そういった思いも、欲望的なものもありますけれども、それよりはやっぱりせつかく陸上をやったのですから、二、三年で終わらないで10年、15年というスパンで物事を考えて取り組める選手をぜひ育てたいというのが私の指導方針であります。

花巻北高校に赴任した平成19年4月、6年間在職したのですが、赴任して疑問に思ったことがありました。花巻北高校OBの先生方もいらっしゃるかと思いますが、非常にすてきな学校です。私も、6年間いましたけれども、今はもう母校のようにも感じるすてきな学校です。ただ、一方で実際現場を見たときに思ったのは、体育教員であれども、ちょうど受験の時期になりますと推薦試験だとか、あと一般入試でも面接があります。そのときに、面接練習のときに生徒は決まってこう言うのです。人のためになりたいので、この大学に進んでこういうことをして、研究をして、こういう人物になりたいので、志願しましたと言っているのです。人のためになりたい、非常に立派な志望動機を述べてくれます、生徒たちは。「そのわりには・・・」とあるのですが、例えば掃除、お小言なのですけれども、掃除、言わないとやらないだとか、あと部室前、ここに自転車を置きちゃだめだよ。危ないでしょう。迷惑でしょう。と言っても、樂をしようと思って部室前まで自転車に乗りつける。それから、部室前にアイスの棒、いろいろそういうごみが実際あったのが現状でした。

あとは、花巻北高校、県内屈指の進学校ですから、勉強も当然頑張らなければいけない学校だというのは、皆さん御承知のとおりだと思います。ただ、都合が悪いと全て勉強のせいにするのです。遅刻をしてくる。きのう遅くまでちょっと宿題、課題が終わらなかったのかというふうな感じで、それをもっともらしく言うわけです。でも、守れている

生徒もいるわけですね、というところで、それはどうかなと私は思いました。

あとは、考える力は当然あります。学力も高いですので、考える力はあるのに、日常生活での工夫がない、これが一番感じたことでした。陸上競技は、大会に行きますと、グラウンドとかフィールドにテントを立てるのです、陣地をつくるために。そのテント立てに、新しく新調したテントを立てるのに何と30分かかっていました。説明書もあるのに。みんなで協力して、誰かがリーダーになって指示を出せば、恐らく物の5分ぐらいで立てられるテントなのですが、いろいろうちくを述べているうちに30分かかって立てられないと。工夫すればすぐ立てられるテントなのです。そういうところがなかなか工夫、頭をそっちに使えるというか、生きる力の部分がちょっと弱いなというふうに私自身は感じておりました。

あとは、指示を出さないと動けない。これは生徒が悪いのではなくて、恐らく育ってきた小中学校、それから今取り巻く大人の環境が、やっぱり何してはだめ、これしてはだめだとか、そういうふうに指示を出すことで、逆に安心、安全で動かせるというふうなことにもつながるのかもしれませんが、そういった部分で自発的に行動することが苦手だなというふうな印象を受けました。

そして、ここです。目標に見合う行動が苦手。目標は高いのです。みんな陸上部員もインターハイに行きたいです、全国で1番になりたいのですと言います。勉強でいうと、みんな東大に行きたいですと言うのですが、では家で学習時間はというと1時間とか、きのう寝てしまいましたとかと言う生徒もおりましたけれども、陸上競技でいっても、インターハイでいっても、なかなか行けるものでもありません。岩手県で6番に入って、東北地区で6番に入らないと、インターハイの切符というのは陸上の場合には手にできません。といったときに、普通にただ走ったり歩いたりして、みんなと同じ練習をやらされるがままにやっていると、やっぱりこの目標というのは達成できないなというふうに私は感じたので、まずこの辺をしっかりと指導していきたいなというふうに感じました。

花巻北高校での指導方針だったのですが、念頭に上げました「息の長い選手に・・・」というのは私のぶれない方針ではございますが、その学校、その学校で特色がございまして、花巻北高校におきましては、陸上競技というスポーツを通じて、自己管理能力、時間管理能力をまず身につけさせたいなど。人に与えられている時間は24時間です。タイムマネジメントができないと、花巻北高校の生徒は、皆さん勉強も部活も頑張りたいとって入ってきている生徒さんたちばかりです。ですので、この24時間を効率よく使うことをやっぱり自分で覚えないと、目標を途中で挫折してしまうことにもなりかねないので、ここは非常に徹底して言いました。時間の使い方、無駄な時間を過ごしていないか。自由な時間も当然あっていいのです。ではなくて、だらだらやっている削れる時間を、自分が休むためだったり、自分の趣味に充てるだとか、プラスアルファの練習に充てる時間になれないかなということ、この辺を徹底して取り組みました。

そして、ここです。なりたい自分に向けて頑張る力ということで、先ほども申し上げま

したが、目標に対しての行動を伴わせるというか、目標、例えばインターハイに行きたいといったら、インターハイに行けるような練習を、やっぱりモチベーションを上げるようなお話をしたりだとか、そういった指導をしていこうというふうに決めました。

そして、応援される人、感謝できる人と。部活やって当たり前、勉強やって当たり前なくて、部活をやるにしても、勉強するにしても、おうちの人のバックアップがあったり、それから部活動にしても、いろんな人の支援があって大会の遠征に行けたりだとか、そして大会に出ること一つとったとしても、大会で記録を出すためには、陸上競技の場合は300人から400人の審判の方が必要になります。その人がいるおかげで、1人の記録が成立するわけです。認められるということになるわけです。だから、そういったバックボーンはちゃんと理解した上で、しっかり競技に取り組んでほしいなど。ただ好き勝手にやるのではなくて、そういった背景を自分の中でわかった上で動ける人になってほしいということで、人間性の育成を柱に指導をしてみました。

とはいえども、私も人間ですので、生徒の前でしっかりと見本となれる人間であるかどうかはちょっとわかりませんし、今日は後ろのほうにうちの上司も来ていますので、仕事を聞かれたら何と答えていいものかわかりませんが、一応花巻北高校ではそういう方針のもとで頑張ってきました。

まずやったことなのですが、本当に基本中の基本です。早寝、早起きということで、朝練習の定着をしました。朝練習、賛否両論なのですが、これは陸上競技の場合だと、朝の競技時間が大体9時もしくは10時競技開始となります。短距離系、跳躍系の場合だと、大体その時間から予選が始まりますので、特にもレベルの高い大会では予選からマックスの力を、パフォーマンスを出していかないと、当然予選通過というのではありません。

ですから、朝から動ける体、大体人間は起きてから5時間ぐらいがベストパフォーマンスを出せるというふうに言われております。3時間ぐらいでちょうど脳のほうが覚醒してきて、そこからやっと神経系、末端のほうまで動きやすい体になるということでしたので、まず早く起きるため、疲れをとるためにはやっぱり早く寝ると。勉強もありますけれども、それは時間をうまく使ってやってくださいということで、これを定着させました。

私の中で、一番すごくやっていて楽しかったなというのはここです。練習日記、練習日誌の提出により自己分析をさせました。部員全員、35人、多いときで40人くらいでしたが、朝練習のときに日誌を提出して、放課後の部活までにはちゃんとコメントを記載して返すということをやっておりました。最初は、やっぱり高校1年生ぐらいですと、この練習日誌というのは書けないのです。疲れただとか、今日はこういう練習をやったぐらいにしか書けないのですが、だんだん競技にのめり込んでくると、書く内容ががらっと変わってきます。きょうはここを意識してやったら動きが変わっただとか、そういった自己の振り返りが非常に選手自身も自己分析ができるようになりましたし、私自身も目が届かないところで、選手はこういうことを考えてやっていたのだなど、ふだんは厳しいとよく言われていましたが、練習日誌の中での私は優しい塚田先生に変わってしまっていて、コミ

コミュニケーションの一つのツールでした。

エピソードとしましては、最初生徒たちは日誌のコメントの文字数を結構比べているのです。お手紙は、もらうとうれしいし、また返されるとうれしいのと同じで、生徒も高校生になっても、書いたものに対して返信があると非常に喜んでくれて、きょうは俺のは5文字だったぜ。しっかりやれとか、そういったこととか、今日はすごく文が長かったねと、そういうふうなことを選手同士で見せ合いっこしていたらしいです。高校1年生ぐらになりますと、時間のない中で書くので、日誌の間に消しゴムのかすを入れたまま私に提出してくるのです。それに対して、消しかすは取れとかというふうな日誌のコメントをしたことが非常に印象に残っていましたと、大学4年生になってから言われました。というような、この日誌は自己分析でもあり、コミュニケーションツールだったということがあります。

それと、ここです。練習環境の整備「雪かき」ということで、花巻北高校、敷地はすごく広いのですが、冬になりますと花巻は結構雪も積もりますし、あと積もった雪が解けなくて凍結ということがありまして、練習場所の確保が非常に難しいです。部活動も、全校の数が非常に多いので、部活動の数も多くて、体育館も自由には使えないのです。必ず分担がありまして、この日の何時から1時間しか使えないと。そういった中で、全国を目指させるというためにはどうしたらいいかと。やっぱりスペースを自分たちでつくらなければならぬよねというふうなことで、朝練習、例えば朝来たときにグラウンドだとか、結構広い駐車場がありましたが、そこも有効な練習スペースになりましたので、雪があったら、まずその日の朝練習は雪かきをやらせておりました。これは、雪かきをちゃんとしたフォームでやると、腰を入れてやるというのは当然いいトレーニングにもなりますし、あと自分たちの練習場所の確保というのもありますし、あとはもう一つ、社会貢献ということをごひ生徒たちには覚えてほしかったなということを取り組ませました。

世の中に出たときに、例えば自分がどこかの会社の社員になって、店の前に来たら雪がありましたといったら、当然雪をかかないとその日の商売は始まらないと思います。そういうことを、高校生の彼らにとって社会というのは今学校でしかないわけですので、学校以外もあるとは思いますが、まず大きな社会としましては学校ですので、自分が住んでいる社会に対して貢献活動ということで雪かきを徹底させました。そうやって自分たちの練習場所のスペースを確保してやってきたということもあります。

それからあと、練習日誌とも連動するのですが、日々どうなりたいのという問いかけで目標達成への意識づけをしました。中には、きょうは体調が悪いのでというふうな、そこで終わるのです。どうしたいの、沈黙、どうしたいの、沈黙、どうしたいのと3回ぐらい聞くと、明日きちんと練習できるようになりたいので、今日は帰らせてくださいというふうな、先にこっちから結論を求めるのではなくて、どうなりたいのと言うと、だんだん生徒のほうも困ってきて、そこで初めて自分はどうするというふうを考えてくるようになってくれました。

これは、競技のときも同じで、やっぱり妥協したくもなるのです、取り組みに対して。どうなりたいの、インターハイに行きたいの、今でいい、大丈夫、大丈夫というふうに大丈夫を3回ぐらい言うと、生徒も不安になってくるのです。私が怖い顔で、本当に大丈夫、大丈夫、本当にいいのというふうに言うと、生徒も不安になってきて、やりますという、言われてやらせている感じもあるのですが、結果的にそうやって自分でどうなりたいかということを考えるきっかけを与えるように恣意的にやっておりました。

厳しかったと思います。どうしてここまで徹底して、厳しくやったかという、アスリートとして競技に向かう姿勢をつくりたかったわけです。その理由は、みんな陸上競技でちゃんと目標があったので、やっぱり指導者としては、その目標を達成させるために導いていくことが必要なのではないかなと思ったので、私自身こういうふうにはやっておりました。

前置きが長くなりましたが、競歩選手、高橋英輝が誕生するまでということで、これはちょうど昨年のいわて国体で優勝した後にガッツポーズで撮った写真です。こちらは、リオデジャネイロオリンピック、昨年8月に行われました大会で、42位に沈んだ大会でしたけれども、そのときの現地での写真です。私も応援に行かせていただきまして、1泊5日の弾丸ツアーで行って応援をさせていただきました。

「箱根駅伝を夢見て・・・」というふうに書いておりますが、彼が入学する前に学校に1本の電話が来るのです。どんな電話かといいますが、「花北からでも箱根駅伝の選手になれますか」という電話だったそうです。たまたまその電話を受けたのが、私と一緒に顧問をやっていた伊藤先生という先生だったのですが、その方が電話をとって、多分花北からそれまで箱根駅伝で走った選手は恐らくいなかったのではないかなと思うのですけれども、そういうことも伊藤先生は念頭に置きながら、「君の努力次第では行けると思うよ」と言ってくれたのです。そこを、いやいや、花北は勉強する学校だからと言われてしまったら、きっと彼はそこで花北にするかどうか迷ったのではないかなと。実際のところ、お母さんから後で聞きますと、中3のときに、彼はとにかく駅伝をやりたいくて、当時強かった一関学院だとか、今も強いのですけれども、不来方高校にしようか、花巻北高校にしようか迷ったそうなのです。でも、親としては、お父さんも花巻北高校のOBでもあったということもありましたし、家からも近いしということもあつたり、あとお勉強もきちんとやってほしいということもあつたようなので、親とすれば花巻北高校に行つてほしいという願いはあつたようなのですが、こういった電話を、彼がかけてきたそうです。

平成20年4月、彼は名門花巻北高校に入学して、夢と希望を抱き、陸上競技部に入部してきました。彼は花巻北高校を選択して、無事入部したわけなのです。

ただし、入部してからの彼なのですが、現実の壁にぶち当たるわけです。線も細かったですので、貧血、故障の連続でした。ジョギングするとすぐ、初心者病といひまして、シンスプリントといって、すねの横が痛くなるのです。シンスプリントになりまして、男子選手のゆっくりのジョグにもついていけないので、彼のプライドも崩れたと思うのです。

が、女子の選手とのジョグにつかせたわけなのです。そうしても、そこでも痛くてやっぱりついていけないというふうなことで、あとは補強が本当に苦手で、今もまだ苦手なほうなのですが、体もかたいですし、腕立てが最初できなかつたのです。倒立もできませんでした。腹筋も人よりも時間がかかっていました。それで、先生は厳しいと。このとおりはばんしゃべりしますので、厳しいという。彼にとっては、きっとそのときの私は御存じのとおり井村コーチです。シンクロの井村コーチ、厳しいと言われていますが、本当は愛情たっぷりの方みたいなのですが。これは最近の私なのですが、何か似てきたなど、髪型も似てきたなど思うのですけれども、こんな印象で彼は高校時代を過ごしたのではないかなというふうに思います。

最初なのですが、要はジョギングもシンスプリントでできなかつたので、ちょうど彼の一歳上に競歩に取り組んでいた先輩がいました。リハビリには有効かなと思ひまして、最初彼には、では先輩の後ろについてちょっと歩いてというふうに、競歩の形も何も教えませんでした。ただ、一緒に先輩とゆっくり歩かせたりだとか、先輩とは別メニューだったのですけれども、痛くて走れないので、とにかく歩いて、まず足づくりから始まりました。リハビリの一環としての競歩が彼の中で始まっております。目的は、このときは高校1年の秋の駅伝に走れるようにするための競歩でした。なので、これでオリンピックに出ようなんて到底彼も思っておりませんし、私も思っておりません。

しかしなのですが、私の指導方針の中で、これはどの学校でもやっているのですけれども、冬期の長距離トレーニングの中に競歩を取り入れております。目的は、ここに書いているとおりの安全対策。冬季になりますと日没も早いので、長距離はやはり走らせて何ぼというか、距離を踏ませて何ぼの種目でもありますので、余りにもちょっと暗くなったところで、しかも凍結しているところで走らせると、交通事故だとか、別なけがも心配されましたので、できるだけ5時前くらいまではちょっと外を走らせて、その足りない分を校舎内で走らせたりしようというふうなことで入れました。ただ、校舎内というのはコンクリートでできておりますので、そこを例えば1時間だとか走ったりしますと、それこそ疲労骨折になりかねないと。足への負担が大きいということで、走るのを半分、競歩を半分というふうな形で全員に取り組みせました。

競歩をやることによりまして、皆さんも競歩の動き見てわかるとおり、骨盤をこうやって動かしますので、股関節回りの強化にもなっております。あと、故障の予防にもなります。

そしてもう一つ、ここワンポイントなのですが、私の中ではそこで人材発掘をしようと。動きがいい子がいたら、とにかくやらせてみたいなというふうにして、せっかく自分も競歩に取り組んで人生を変えていただいたので、そこでまた違った才能を持った子がいたら、その子にも勧めてみたいなというふうな思いもありまして、競歩をやらせておりました。

そうしたところ、高橋英輝選手の動きに目がとまる自分がいました。何がすごかったかという、腰の切り返しがまず早かったということと、競歩は接地するときに膝を伸ばし

て接地しなければいけないのですが、大体の子はがちがちになって、ロボットみたいになるか、もしくは潰れてしまうのです。膝が曲がってしまうのですけれども、彼はそれをいとも簡単に、スムーズに動きを連動させてことができました。これはいいのではないかなど。リハビリをやっているときの競歩は、足が痛いものなので、やっぱりロボットだったのですけれども、それが半年たって筋力がついてきたら、あれ、細かいことを言わなくても動きができていうふうにも思いましたので、彼はそこからは有無を言わさずというか、こっちがいいのではないかみたいな誘導もしつつ、あとは走るときに、走ること、歩くことと分けて、競歩のトレーニングとランニングのトレーニングに分けるのですが、意識的に、では今日は英輝は競歩のほうのトレーニングで、ちょっと一緒についていってなんていうふうな感じで促していくようになりまして、競歩選手が生まれてくるわけです。

「私のプライド」と書いたのですが、花巻北高校は競歩に取り組みやすい環境でもあったなというふうに、逆に思います。今でこそ大分競歩のイメージが変わったのですが、それまでは競歩は足が遅い選手がやる種目だとか、それから高校の指導者の中でも、長距離で予選を通らなかった子が、何とか最後高総体で県大会に出てほしいとあって、枠があいているから競歩に入れられてしまうような種目だったのです。私は、やっぱり自分はやってきたという自負もありましたので、ちょっとプライドも許さないなということで、花巻北高校で公言していたのは、走れない選手には競歩をやらせないよと。しっかり駅伝も走れて、走る能力もある子でないと競歩はやらせないよというふうなことを公言していました。これを強く言える背景にも、ちょうど彼の二歳上の先輩が、やっぱり長距離で入ってきたのですけれども、故障して、彼女も適性があったので競歩を勧めたら、インターハイで何とか入賞してくれました。そういう全国の実績ができてくると、選手への説得力というのも増してきました、そうだよな、その女の先輩は駅伝も走っていたしなど。駅伝もエース区間を走っていました。でするので、走れないと競歩はやらせてもらえないのだというふうな位置づけをさせましてやりました。

あとは、私の中でも、花北で競歩をやるからには最低でも東北大会、やるからには全国で入賞させたいというふうな、そういう思いもありましたので、その背景にあるのは私の反骨精神です。私は、自分で自負しておりますのは、岩手県の女子で競歩を始めたというか、競歩のパイオニアは私だったと思っております。最初、私が競技に取り組み始めたときには、県大会で出る人数が6人ぐらい。そこで1番にはなりましたが、やっぱり人の見る目というのは、1番をとっても100メートルで1番をとるのと、競歩で1番をとるのという、やっぱり100メートルのほうがすごいなと皆さんも思いますよね。うんとは言えないと思いますが、私はそう思いました。なので、だから自分が全国大会に出るといふのは、100メートルで東北大会に出られるぐらいでしかないかなというふうに、すごく反骨心というか、競歩では絶対入賞しないと認めてもらえないのだというふうな、そういう思いがあったので、当然私が始めたころは、周りの人も競歩の動きなんか見たことも

なかったで、高校時代も高松の池だとかアネックスカワトクのあたりを歩いていますと、気づくと小学生がまねしてついてきて、カルガモの親子のような感じになっているような光景もあったのですけれども、そういう思い、何くそという思いがやっぱり強かったので、何とかやるからには、こういうふうな思いで、全国で戦わせたいなという思いでずっとやってきました。

この気持ちがあったので、私自身も国体に11回出ましたけれども、国体に出るからには絶対入賞しないと自分は意味がない、自分の価値はないというふうにならずと自分にも言い聞かせてきたので、頑張れたのかなと。だから、11回目に入賞できなかったときに、もういいかなというふうに思えたのかなというふうにも思います。

この反骨精神があったので、そしてこういう思いがあって、競歩というのはこういう位置づけだよというふうな形ができたので、花北では競歩に取り組みやすい環境だったのではないかなというふうに思います。

「チャンスをつかむ力」、彼は最初から好んで競歩をやったわけではないのです。ちょうど彼が大学4年生のときに、「陸上競技マガジン」で全国紙の表紙を飾ることにもなったのですが、そこでも彼は述べています。最初は格好悪いと思っていましたと、はっきりここにも書いているのです。私が半強制的にやらせたと。最初は嫌々だったけれども、半強制的にやっているうちに、いつの間にか記録が伸びていったのです。自分が経験したこともない、彼は自分が走る種目で県大会に出られるのがやっとだったのですが、表彰台に乗ったことはなかったのです。競歩を始めて、高校2年生の高校総体では、彼は2番目に高いところの表彰台に乗ることができたのです。記録が伸びるおもしろさを知って、彼は最後に、この本も書いていますが、「今では自分が夢中になれるものになった」と言ってくれています。

リハビリのための競歩から、彼にとっては自分を生かすための競歩に変わっていきました。ここ、異論を唱える方はいるかもしれませんが、いや、もっと生徒の自主性をとかというのものもあるかもしれませんが、でもそういうふうに通じたことによって、現実、高橋英輝は競歩を選択してくれたという、選択の仕方の一つとして、これが全てではないのですよ。こういうやり方がいいとは私も思わないですが、そういうことでもオリンピックにつながっていったのではないかなというふうに思っております。

本格的に始めて半年、高校2年生で初めて全国大会、国体に出ました。そこで、彼は初めて出た全国大会なのですが、5位入賞というふうなことで、やっと県大会の表彰台に上った選手が、今度は全国での表彰台に上ることができました。このときにも、私もコーチで国体に帯同していましたので、練習日誌のやりとりの中で、彼が今でも印象に残っていると書いていたのは、この日彼が5位に入賞して、いろいろ日誌に書いてきてくれたことに対して私が返したコメントは、英輝なら必ず日の丸をつける日が来るよといったコメントが彼はすごく印象に残っていると書いているそうです。

私自身も、オリンピックまでいかななくても、ジュニアぐらいでは日の丸はつけてくれる

かなと、この能力、そして初めて出てこれぐらいの力を発揮できるのだったら、できるのではないかなというふうに思っていました。彼はそれまでもまさか日の丸なんてと、もらったときはうれしかったけれども、まさかな、というふうに思っていたそうです。ただ、その日誌は今でもちゃんと持っていてくれているそうです。

翌年沖縄のインターハイで、男子5,000メートル競歩で第4位と、残念ながら1位にはなれませんでした。これが高橋英輝です。ここにいる2番の選手、秋田の子なのですが、この子が今度世界陸上50キロで、秋田工業の選手ですが、世界陸上に出場します。ここにいた選手は、彼はロンドンオリンピックに出場した選手です。ちょうどこの世代は強い選手が固まっていたという時代でした。今まさに活躍してくれている世代です。

高橋英輝の成長の足跡なのですが、このとおり、記録は皆さんのお手元にもありますけれども、最初初めて出た大会が東北高校大会というのがあるのですが、22分31秒57から、社会人1年目には18分37秒60と、約4分近く。4分近くとはどれぐらいの距離かといいますと、彼のペースでいうと約1キロ。1キロを自分自身で成長して速くなっていったと、1キロの距離を縮めていったというふうになります。

現在なのですが、高校時代、1万メートルウオークに44分12秒33かかっていたのですが、現在は日本記録を保持してまして、38分01秒49ということで、このような形で彼は上ってくれました。

「日本代表 高橋英輝へ」ということで、昨年度は知事表敬もいたしまして、そして地元の花巻市役所には垂れ幕がこうやって飾られることになりました。

彼は、高校から大学を選ぶときに、またちょっとエピソードがありまして、すごく迷いました。競歩に専念したいという思いもあって、最初東洋大学か順天堂大学に行きたいと。東洋大学に強い選手もおりましたし、それから順天堂大学は今日本の強化コーチ、監督、競歩のトップをやっています今村さんという方がコーチで入っていましたので、その環境に行きたいと最初言っていたのです。家でも親とけんかをしたりだとかという多感な時期でしたので、親と口をきかなかつたりとかして、親も心配して、「先生、こう言っているんですけど、どうですかね」なんて言って、最終的には本人次第ではないですかねという話もしながら、ただ私のほうは一応何を選んでもいいように、まずは最低限の入賞をさせて、選択肢、可能性、チャンスがふえるように、推薦でも出せる、自分でも受けられるような手だてをとってあげようと思って、まずは私の役目は全国大会で入賞させなければいけないというふうに思って取り組んでおりました。

インターハイで4位になりました。彼の中では、多分1番を当然狙っていたと思うのですが、4位ということで自信がなかったのでしょうか。インターハイが終わった後に、ある大学からも声をかけられまして、山梨学院大学はオリンピックもいっぱい出している大学なのですが、そこの合宿に行ってみたくて言ったので、コーチの方と連絡をとって、彼を練習に行かせてみました。どうだったと言ったら、すごくよかったです。勉強になりました。と言ったら、次は彼が何を言うかなと思ったら、岩手大学のオープン

キャンパスに行きたいです。と言って、岩手大学には私の大学時代の恩師の清水先生がおりますので、指導者はいるのですが、当然推薦の枠というのがあまり無かったのと、それから彼が勉強したい学科が、英語のほうを勉強したいという話だったので、ちょうどそっちには推薦制度がなかったので、もう自力で受けるしかなかったのです。それは、彼は学力もあったので、きちんと勉強もやっていたので、そこは問題ないかなと思ったのですが、ライバル、競い合う環境としてはどうかと。私は、どちらかといったら競い合えるように関東に出てほしいなと思ったのですが、彼は岩手大学もちょっと選択肢の中に入ってきて、今まで一言もそんなこと言ったことなかったのですが、じゃあ、ちょっと行ってきて、と言ってオープンキャンパスに行かせました。どうだった、楽しそうでしたと言って帰ってきまして、先生、僕、岩手大学行きますと言って、えっ、競歩どうするのかなと思って、競歩はと聞いたら、やります。楽しみながらやりますと言い始めたのです。

今度インターハイが終わって、8月中旬、オープンキャンパス終わって、お盆前、そしてたらいきなり彼は、自分で自ら国体の選考会に出て権利を勝ち得ていたのに、先生、国体出ませんと言い始めて、私も陸上の強化コーチをやっていたので、ちょっと大人の事情なのですけれども、彼は得点源なわけです。入賞できますから。彼が歩けば、最低4位だったら5点はとれるわけなのです。5点は、陸上界にはとっても大事な話で、これ出ないというふうに、どうしようかなと。ここはちょっとぐっところえて、いやいや、あなたは自分で出ると言って、それで落とされた子もいるんでしょうと、ちょっとくどくどと説教して、国体が終わるのは10月の下旬だと。ミニ国体までは出るのです。東北総体というのがあるのですが、それが8月下旬なのですが、そっちは出る言うのです。1カ月早く切り上げて受験勉強に切りかえたところで、あなたはやり残したことがないの、と言ったら彼は1日考えて、先生、やっぱり国体出ますというふうに言ってくれて、よかったと思ったのですが、そして国体は残念ながら4位だったのですけれども、頑張ってくれたなというふうに思います。

そこから彼は受験生に切りかわって、一般受験で岩手大学に入学しました。競歩、どうなるのかなと思って、会えばちゃんと挨拶もして、逃げることはなかったの、挨拶もしてくれますし、練習もしていましたし、そしてあと清水先生の御指導もありまして、大学3年生あたりから、めきめきと力をつけてきて、日本でトップクラスになるようになりました。

今度は、大学4年生になったときに進路でまた彼は悩みまして、清水先生から、私は教え子なもので、英輝も教え子なもので、塚田、ちょっと英輝の相談に乗ってやってよとかと言われて、彼とちょっと話をして、社会人になったときどうするのと言ったら、彼は小学校の先生になりたいですと言ったのです。いいと思うよと。ただ、日本の陸上界の競歩のブロックの中では、彼の素質というか、素材は物すごいものを持っていると。やっぱり彼がこれから世界で活躍していつてもらわなければいけないという、そういう存在になっていたの、確かに私自身も教員をやりながら競技を7年間ほど続けましたが、国体の

5,000メートルという競技だったら、何とか練習をカバーすることはできるのですが、国際大会は20キロです。20キロの練習を積むというのは、ほぼマラソン練習をするのと一緒に距離を踏まなければいけません。朝20キロ走って、それから午後にもやってとなったときに、教員をやりながら両立できるのかというふうなことで、清水先生も当然実業団に送りたいというふうに話し、環境があるところでしっかり、そしてレベルの高いコーチがいるところで競技を取り組ませたいというところで、私もそうでしたし、清水先生もそういう思いでしたから、どうにかしてそういうふうに誘導できないかなというふうに悩みまして、それもよかったかわからないのですけれども、小学校の先生は、年齢制限はあるけれども、まだまだ受けられると。ただ、岩手県の中でオリンピックに出た先生は、小学校の先生とかはいないと思うよと。そういう経験を積んでから、子供たちにその経験を伝える先生が一人ぐらいいてもいいのではないかなんて言ったら、ちょっと彼も考え直し始めまして、あと一番大きかったことは、彼は大学4年生まで1番になったことがなかったのです。日本の中で1番になったことがなくて、だからこそ世界の大会には出ていたのですが、自信がなかったのではないかなというふうに思います。

彼が日本インカレで、初めて表彰台で1番高いところに立ってから、初めて清水先生のほうに、富士通に行って競技をやりたいですというふうなことを言って、名門のオリンピックを何人も輩出している富士通という環境に彼は飛び込んで、そこからオリンピックに出場することができたというふうなエピソードがありました。

なので、節目節目でやっぱり彼の気持ちを尊重しつつ、ちょっと選択肢の幅をいろいろ広げてやったことも、今さらながらよかったのかなというふうには思っております。

トップアスリートを育成・強化していくにはということなのですが、経験から言える自論なのですが、私は正直申し上げて、高橋英輝はオリンピックを育てようとして育てたわけではなかったのです。本当に申しわけございません。その結論はこうなのですが、たまたまといいますか、出会った流れでそういうふうになっていったなというふうに思っております。

結果的によかったこととしましては、ここだと思えます。エデュケーションの時期とコーチングの時期の比率です。私は、これまでこういったときにお話をさせてもらうときに、ティーチングとコーチングというふうにしゃべっていたのですが、何かちょっとティーチングは違うかなと、教えるとは一方的かなとちょっと思って、最近是一緒に育っていったと。私自身も彼を通していろんなことを経験して、考えて、勉強して育ったと。それから、教え育てるエデュケーションのほう合っているのかなというふうにちょっと思って、最近はこのように変えさせていただきました。

最初は、完全にエデュケーション、教えること、教育のほうが多いです。しつけ、指導、本当に生活指導から。そして、だんだん、どうなりたいのと。自分の身の回りのことが何も言われなくなってくると、本当に今度は技術のことだとか、体調のことだとか、アスリートとして向き合う時間がふえてくるので、こういうふうにコーチングの比率が高くなっ

できます。こういうふうな時期が段階を経て、最初高校1年生から高校2年生まで、まさにほとんど教育です。教育していましたが、後半になってきて、彼も全国での戦いになってきたら、だんだんこっちが減ってきて、逆に導き出すというか、どうする、今どうというやりとりで、感覚の話だとか、今こういう動きがこうなのですけれども、がしがししているとか、独特の感性を持っているので、そういった会話が増えていった。これが、こういう比率が上手くいったかなというふうに思っております。これは、一方的にエデュケーションばかりだと、自分で考える選手は多分できないのではないかなというふうに思っております。

あとは、ここも大きかったかなと。次のステージに希望を残せる結果を高校のときに出せたことかなというふうに思っています。彼にも聞いたのです。もし高校時代に入賞していなかったらどうだったと言ったら、競技楽しいから、競技やったけれども、オリンピックを狙おうとかというモチベーションにはならなかったですというふうな話をしていました。彼は、彼自身に合った岩手大学という環境を見つけて、そこで競技を続けて、今に至って、そういうことで自分なりに考えて、もっと高みを、その次のステージに行ってみようというふうに導いたことがよかったかなというふうに思っています。

ここからは、本人に直接、こういうふうなことで英輝の話をしなければいけないのだけれども、ちょっと質問に答えてくれると、ここからは彼とのやりとりのお話になるのですが、彼は本気で世界を目指した時期はいつだったかということで、いつだったのでしょうかと、私も聞いてびっくりしました。社会人1年目だそうです。もっと前から早く本気で世界を目指したのかなというふうに思っていたら、社会人1年目から本気になりましたと。理由はこれですと。それまでの自分は、日本一になれていなかったから、自信がなかったのです。確かに世界代表の枠は2枠、3枠あります。要は、日本で2番、3番でも枠に入れるのです。彼は、それまで日本一というのをとったことがなかったのが、俺はまだ1番ではないのだというのが、自信の無さから、例えばちょっと楽しんで競技をやりたいですとか、そういったところになったので、それから実業団よりは教員でとかというふうな言葉になっていったのではないかなというふうに思います。

ここからは、日本オリンピック委員会が昨年度リオデジャネイロオリンピックに出た選手全員にアンケートをとって、調査結果をまとめているのですが、オリンピックが競技を始めたきっかけというのは、外因的要因というのは親に勧められてだとか、兄弟に勧められてだとか、指導者やコーチに勧められて、あとはそこに競技をやる環境があったというのが結構大きなパーセンテージを占めていました。女性選手は、お母さんの影響が非常に大きいと言われております。男子選手は、お父さんの影響もあるのですが、指導者やコーチに勧められて変わっていくということが大きいというふうにも言われているそうです。

内因的要因というのは、楽しそうでおもしろそうだったからまず始めてみよう、専門的に取り組んだという、始めたきっかけですね、おもしろそうだったから。あとは、自分に合った競技だと思ったから。あとはただ何となくというふうなことで、高橋英輝が競歩に

取り組んだのも、一つここに入っているのかなと。あと、彼の場合は、こっちのほうだったのかなと。嫌々だったけれどもとは書いていませんでしたけれどもというふうな感じですか。

あとは、オリンピック出場者の傾向なのですが、専門的に競技に初めて触れた年齢というのは、意外とまばらなのですが、平均すると5歳から15歳の間にはオリンピック、その自分が出た種目に触れているのです。5歳とか4歳というのは、例えば卓球だとか、水泳だとか、幼少期から技術を身につけないといけない種目は、これぐらいから始めないともう遅いのですよというのがこの調査結果からもわかっております。陸上とかパワー系、持久系の種目というのは、この年代、15歳、14歳から始めても十分間に合うというふうにも言われております。専門的に競技活動を始めた年齢というのが、ここが平均値なのですが、大体8歳から16歳、女の子は6歳から16歳ということで、競技は例えば卓球なんかだと3歳ぐらいから始めていても、ほかの習い事もやっていたりするのです。ただ、それに専念してやろうと始めるのは、この8歳、6歳ぐらい、卓球だとか、水泳だとか。大体いろいろオリンピックの傾向を見ますと、幼少期はいろんな種目を実はやっているのです。野球をやっていたり、それからバスケットをやっていたり、水泳をやっていたり。そこから、その中の一つで種目があって、1個選んでやっていく、もしくはそれこそ高校に入ってから新しい競技と出会って始めていくというふうになっております。

ここにおられる城内先生のお嬢さんも、高校に入ってからウエートリフティング競技を始めて、今では日の丸もつけまして、ナショナルコーチをされておりますので、私よりもナショナルチームについては非常に詳しいのではないかなというふうに思っておりますけれども。

ちょっと見づらい図になるのですが、これは調査結果を私が図にまとめたのですけれども、先ほどの図にあらわすと、大体こういう時期から競技を始める時期ですよ。そして、タイムラグが、専門的に始めるまでやっぱり2年ぐらい時間がかかっていますというのがこれでおわかりになると思います。

そして、この白地の12歳から18歳、ここはアスリートにとって一番トレーニングを積みなければいけない時期。トップアスリートになるためには、ここで一番トレーニングを積みなければいけない時期。体もちょうど成長の段階で、少しずつ成長に合わせてトレーニングをしていくことが非常に重要です。そのためには、早期に世界で活動を経験すると。なので、卓球だとカテゴリー、小学校の選手でも世界大会があったりとかして、世界という雰囲気になれさせているのです。卓球は、そういうところですごく進んでいると思います。

それからあとは、よきモデル選手と一緒にトレーニングをすることで、やっぱりまねることというのは非常に運動には重要で、モデルがいると言葉で伝わらない部分を見て学ぶということもできるし、一緒にトレーニングすることが大事ですよということが言えると思います。

そして、調べてみますと、カテゴリー代表、例えばユース、アンダー16とかアンダー18、それからジュニアというふうなことなのですが、専門的に競技を始めてから大体5年ぐらいいまで、トップアスリートになる子は代表に選ばれているケースが多いというような傾向が出ております。例外もいると思いますが、大体専門的に始めて5年ぐらいいは、やっぱりちょっと辛抱して続けてもらって、そこから自分の能力がぐんと伸びてくるというケースもあると思います。高橋英輝もこれに該当してきます。17歳で競技を開始しまして、22歳でユニバーシアード代表、アジア大会代表というふうなことで、24歳でオリンピックになりましたと。

オリンピック等輩出までの強化過程になるのですが、ちょっと見づらくてごめんなさい。競技者、これは一般的に競技に取り組んでいる人です。ここタレントアスリート、トップまで行かないですけども、その能力がちょっと見え隠れするような、代表になれるかなれないかの選手、全国レベル選手です。こっちになると世界クラス、日本代表クラスになるのですが、大体タレントアスリートと言われます全国レベルまでは、強化の母体というのは所属、例えば学校だったり、あとは県の競技団体が中心となってやっているのが通常です。日本でJOCが考え編み出した、国策としてやっていっているのがJOCエリートアカデミー、これが競技者の中で能力がちょっと高いなというような子を選抜して集めて、卓球だとかレスリング、フェンシング、今いろいろありますが、この日本代表クラスまで続けるということをしてします。ただ、エリートアカデミーは高校生まで、早くは中学校から大学生に上がるのところまでのところを一貫指導をしていくというシステムなので、大学生になると普通の大学に行ったり、競技を続ける環境の大学に行ったり、それからもしくは実業団に行ったりというふうなシステムなのです。

大体ここまで来ると、あとは自分でどうにかして頑張っていこうという選手も出てきます。このクラスになってくると、今度は中央競技団体が強化指定選手というのを設けてまして、ここによりまして専属のコーチをつけたりして強化が始まると。これが強化の母体の流れになっております。

ちょっとお金の、大人の発言になってくると、強化費の支援になるのですが、ここまでのところというのは、大体県内の競技団体の強化費、県からも補助金は出ていると思いますが、実は皆さんここがお金がかかるのではないかなと、競技を続けていく上でここが一番お金がかかるのではないかなというふうに思っている方も多いかと思うのですが、ここに上がるまでに、本当は一番競技にお金を費やしていかなければいけない。費やすというか、必然的に合宿をする回数をふやしたりだとか、遠征に行ったり、実力をつけなければいけない時期が一番お金がかかるのです。ここになってしまえば、JOCの強化費があったり、中央競技団体の強化費があったり、それから自分の所属企業の強化費があったりというふうなことで、やっぱりここでいかに合宿だとか練習を積めるかというのがポイントになってくるのかなというふうに思います。

皆さん御存じのアルソックありますよね。あそこは、オリンピック選手、すごくいっぱ

い抱えているのです。競歩のコーチでアルソックに勤めていた方がいて、実際自分もそこで競技をされていた方がいて、「アルソック、あんなに選手抱えて大丈夫なんですか」と言っていたら、アルソックさんはやっぱりこのクラスの選手しか抱えないから、実は強化費全然アルソックとしては出していないのです。微々たるものは出しているけれども、あとはサポートできるぐらいの金額、そして要はここはほかから、中央競技団体やJOCから強化費が出るから、アルソックとすれば生活費ぐらいをやって、あと褒賞金をやればオーケーだから、こうやって抱えられるのですという話を聞いて、なるほどなど、うまいことを会社は覚えた。そして、CMをつくらせたら、トップアスリートを呼んできて、どこかの倉庫の前で歩かせたりとかすると、芸能人を使うCMよりもコストダウンということにもなりますので、そうやって企業はうまく支援をしていくと。ただし、本当に練習に専念させる環境ですので、アルソックさんの場合だと、大体月1回入社してもらったりだとかというふうな感じでやらせているというお話でした。

逆に、これは高橋英輝から聞いたお話なのですが、新体操、フェアリージャパン、あの子どもたちは今18歳、19歳の子どもたちなのですが、新体操はなかなか支援する企業が見つからなくて、実はおうちの人から仕送りをしていただいていると。競技によって非常にバランスが悪いというのはあるそうです。陸上は非常に恵まれているほうで、駅伝チームとかもあつたりとかして、本当に企業のバックアップがいろいろあるのですが、競技によってはなかなか支援が見つからないというのがあるということでした。

東北のオリンピック輩出についてということなのですが、昨年のリオのオリンピックの選手団名簿でいろいろ調べてみたのです。出生地で選手団名簿は数えるのですが、実は岩手は東北で最下位だったのです。青森県は、何と国体の順位が岩手よりもずっと下なのですが、オリンピックの輩出は5名ということ。宮城は、何となく仙台とかいろいろ環境整っているというふうに思うのですが、宮城は7名、岩手は1名、高橋英輝のみでした。ただ、きっと生まれてどこか行っているのでしょうか。一家転居して、県外の学校とか行っているのでしょうかと思われるかもしれませんが、学校の出たところまで調べたのです。そして、高校もなのですが、ほとんどが小中までは出生地で生活しているのです。しっかり競技に取り組んでいると。レスリング、テニスは、高校から県外へ出ていくケースが多いみたいなのですが、それ以外は実は地元でみんな鍛えていると。

それから、岩手でも東北の平均値くらい、3.何人ぐらいはオリンピックの輩出ができるのではないかなど、何か知恵を絞れば、皆さんからお知恵を拝借すればできるのではないかなというふうに私自身は思っております。

岩手から世界へということで、私の考え、これはコーチ視点です。陸上競技の指導者としての視点です。まずは、指導力の向上。技術以外のコーチング。技術は、今は選手が海外に行って学ぶこともできます。ただ、それ以外のところのコーチング、目標設定だったり、あとはマネジメント的な、例えば高橋英輝だったら、彼をオリンピックにするためにバックアップ体制をつくっていったり、何が必要かということチームを組んで考えてい

ったりとか、それから特にジュニア期を長期ビジョンでやっぱり考える必要があるのではないかなと。どうしても選手も、指導者も、保護者も今々の結果が欲しいのです。私もそうでした。どうしても今勝たせてやるとこの子たち自信がつくよなと思うと、やっぱり無理しがちです。その結果、けがをさせてしまったりだとか、それから気持ちのほうが進みつかなくなって、バーンアウトしてしまったりとかということもあります。意外とこの子、また競技を続けたらもっと伸びるのになという子が高校で競技を終わってしまったりだとか。岩手の傾向だと、いろんな種目ありますが、意外と高校で競技を終わるという子のほうが非常に多くて、そこはすごく残念だなと。やっぱり時間をかけてこそ、選手というのはつくられるのではないかなと私は思います。

それから、競技に取り組む環境づくりということで、トップアスリートは専念できる環境、実業団みたいなバックアップはやっぱり当然必要だろうなと。あとは、選手を発掘、育成していく段階では、意外とここは大事なかなと。それしかない環境、ある程度の誘導ということで、この前、テレビ番組で高梨沙羅さんの特集をやっていました。彼女がジャンプを始めたきっかけは、そこに山があったから。お兄ちゃんもジャンプをやっていたと、家族みんなジャンプをやっていたと。それしかない環境、言うなれば身近にある環境ですよ。となると、取り組みやすい環境もあるかもしれない。

それから、岩手でも、岩手の強みですね、その地域の強み。例えば岩手町だったらホッケー、小沢みさきさん、今はもう結婚されて早野みさきさんになりましたが、小沢さんも前に隣の席で働いていたのですが、小3ぐらいからホッケーをやったと。何でかといったら、みんなやっていたからと。結局それぐらいの理由でいいのです。なので、そういう環境づくり、ホッケーからのオリンピックは岩手では輩出しています。それから、それしかない環境という岩手の強み、地域の強みをもっと生かしていく必要があるのではないかなと。高橋英輝はこれで成功しましたが、ある程度の誘導や、やっぱり選択肢は選手にはみんなは同じだと思います。好きなものと適性があるものは、やっぱり違うのです。どうしても好きなものをやらせたいという親の気持ち、本人の気持ち、当然あると思うのですが、ただこれから先、見る世界が変わるということを考えてときに、もしそういう能力があるのだったら、私はぜひ適性のあるものを選んでほしいなと。そうすると、出会う人も変わってくるし。私もそうでした。競歩をやらなかったら、今の私はないと思いますし。だから、ある程度の誘導というのは、選択肢は与えるけれども、導き方というのは非常に重要なのではないかなと。ここはコーチングともつながると思うのですが、そういったところは重要なかなと。

あと、専念できる環境にもつながりますが、代表になるまでの金銭的な支援。部活くらいの練習では、オリンピックになれませんよと。一日2時間では無理ですよと。プロになるまでは1万時間の法則というのがありますし、これは通説ですけども、365日1日3時間練習をすると、約10年かかるのです。それまでのレベルに達するまでは。だから、やはり時間をかけなければいけませんし、高橋英輝の合宿スタイルでいいですよと、朝起きて

体幹トレーニングをやって、午前中に20キロから25キロ、給水も当然与えながらのトレーニングをやります。午後になりますと、休憩をさせてから、今度回復ストロージョグという、ゆっくり歩いたりするのを60分ぐらいやります。そして、しっかり食べて、あと体のケア、サポートを入れて寝るという生活をほぼ毎日、365日やっているのです。今彼はあれぐらいの選手になっているわけなのです。なので、こういうふうな質、量重視に耐えられるだけの金銭的な支援をしていく必要はあるのではないかなというふうに思っております。

トップアスリートは一日にしてならず。個人努力に任せていては現状は変わらない。先ほどお見せしましたとおり、東北の中で岩手は1人という現状は変わらないのではないかなというふうに私は思います。組織立った仕掛けづくりと支援が必要なのではないかなというふうに思っております。

ここからは、高橋英輝自身が考える岩手から世界へということ、高橋英輝が考える英輝に続くオリンピックを岩手から輩出するにはどうしたらいいと思うということを彼にラインで投げかけたら、彼からこういうコメントが返ってきました。オリンピック視点です。選手がトップ大会を目標に据えられるような仕組みと機会づくりと。例えばトップ選手との合宿だとか、指導者とのコミュニケーション等、それから競技力の向上とは直接かかわらない場面での指導、人間性の育成、壁にぶつかったときに乗り越えられる下地がやっぱり必要だと。彼は、オリンピックが終わって、オリンピック前の世界選手権47位、オリンピック42位と、代表としては正直恥ずかしい結果です。どん底を味わっています。でも、彼は腐らずにやれたのは、やっぱり今まで下地があったから頑張ってきたというよううれしい話をしてくれましたが、そういうことを言ってくれています。やっぱりこういうところというのは、最後の振り絞る力というか、何かぶつかったときもそうですし、苦しい場面でさらにアスリートが乗り越えるときに、その競技以外のところで培った精神性という、人間性というのが生きてくるのかなと。また、これですね。選手と周りと同じ方向を向いて、世界を目指す。どちらか一方だけが頑張っても達成できないもの。これは、周りもそうだと思います。例えば若いジュニアの子で能力のある選手が出ましたとなると、やはり周りは、わあ、ではオリンピック期待できるねとなります。盛り上がると思います。でも、まだその心の準備ができていないのに周りだけが走ってしまって、いろんなものを、環境なんかも準備してしまうと、その子はもしかしたら潰れてしまうかもしれない。だから、同じ歩みの速度で持っていくということが、アスリートをしっかり上につなげていくためには必要なのではないかなと。彼のこの言葉を聞いて、私はそういうふうに感じましたし、彼自身もやっぱりオリンピックが決まってから彼の生活も変わりました。取材もすごく多いです。高校時代に教えた私にも取材が非常多かったです。おまけに、新聞には年齢も出てしまう始末でございます。あれはどうにかならないものかなと思うのですが。というふうに、やっぱり生活が一変してしまうのです。注目度が一気に上がりますので、やっぱりそういうときに同じ歩調でもって、歩みでもって見守り、サポートできる体制づく

りというのは、すごく必要なのではないかなというふうに思います。

高橋英輝からのコメントは、これは本人そのものの文になりますが、「私はオリンピックへの出場が決まってから、オリンピックとして社会的に求められているモノ・責任に初めて気付き、本番では結果を出せなかったことから、自分の出したタイムに対して、競技力・人間力がまだまだ劣っていたなと感じました。是非、競技力・人間力共に向上心を持ち続けられる、オリンピック本番で結果を出せるアスリートが岩手からたくさん出てくれればと思います」ということを彼はコメントしてくれました。

ですので、彼がこんな立派なことを言うなんて、私も高校時代の彼からは余り想像できないと思うのですが、本当に周りの支援もあって、彼も本当のオリンピックになってきたなというふうに感じております。

最後のほうになります、トップアスリートの輩出には。結論からいうと、時間がかかるということをお理解いただきたい。選手とすれば、やっぱり息の長い選手にならないと、要は3年、5年ではオリンピックにはなりませんよということなので、やっぱりそういう気持ちで競技に向き合ってほしい。長期ビジョンでの目標設定、長期ビジョンでのモチベーション、そして主体的に考えて行動できる選手になってほしいと思います。

これは、私を含め、コーチとしてはやっぱり長期ビジョンでのトレーニングの計画と指導、それから適性を見きわめ、それから自分の手柄だけにしないということがすごく大事だなと指導者は思います。やっぱり次のステージ、次のステージに必要なキーパーソンを探して、その人に合った、その選手に合った支援をサポートできる人を探してつながっていくことも、選手の育成には非常に重要ではないかなと思います。

支える環境としましては、やっぱりトップアスリートというのは時間をかけて育つのだよというふうな理解をぜひしていただきたい。すぐに結果を求めても、できるものではないですよということです。それから、輩出に向けた組織的な支援という、例えばスポンサーとか、そういうものができてくると、もっともっと岩手からも多くのアスリートが輩出できるのではないかなと思います。

いろいろ賛否両論あるとは思いますが、岩手からトップアスリート輩出を願う理由というのは、これ私は高橋英輝がオリンピックに出て感じたものがございました。なぜトップアスリートを岩手から出したいのかなと。市役所に、先ほどお見せしましたとおりオリンピック出場の懸垂幕ができました。そして、彼が生まれた故郷の宮野目地区の道路には、のぼり旗が設置されました。母校には横断幕や懸垂幕、そしてパブリックビューイングをやろうとしたのですが、当日錦織圭のテニスのほうが先になって、パブリックビューイングは中止になってしまいましたが、ここだと思うのです。1人スター選手ができると、さまざまところに人の輪ができて、地域が活性化するのです。ちょうどつい先日、東京のほうの高校野球の県大会のレベルでも、清宮君というスター選手がいると、みんなこぞって球場に集まりますよね。そして、高野連のほうでは収益を得るわけなのですが、ああやって人が集まるとコミュニティーができてくると。まさにこの広がるコミュニティーとい

うところで、トップアスリートというのは貢献してくれるのではないかなというふうに思っています。

だからこそ、震災を経た岩手からもトップアスリートが一人、二人でも多く出てくれれば、その地域、そして県全体に人の輪ができて、コミュニティーが広がって活性化してくるのではないかなと私自身思います。

今の私にできることとしましては、今の主査スポーツ振興専門員という立場では、息の長い選手になれるようコミュニケーションによる支援。これは、意外と競技団体との関係も密にありますので、社会人選手、それからジュニアの選手とも接する機会があります。私の経験も含めて、こういうふうにしたらいよいよかアドバイスやサポートができるのではないかなというふうに私は思っております。

陸上指導者としては、やはり息の長い選手の育成と、ジュニアとシニアカテゴリーのつなぎ役をやっていきたくと。私自身は、日の丸はジュニアで終わりました。やっぱり今々の結果を求めて、先を見据えたトレーニングができなかったというのが敗因だと思っています。能力も足りなかったと思いますが。だからこそ、その辺のメンタル的なサポートだったり、トレーニングの提供ができればいいなというふうに思っています。

あとは、教え子がオリンピックになってくれたことで、今ちょっと言えるのはトップアスリートの選手育成、少し自信を持って言えるのかなというふうに思っております。

ロンドンの世界陸上ですが、8月13日日曜日、これ今日一番言いたかったことかもしれませんが、夜の10時20分スタートになります。TBS系でやりますので、今度は大丈夫、映ると思いますので、どれだけ成長しているか、ぜひ応援をよろしくお願いたいなと。本人は、期待しててくださいと言っておりましたが、そういったときに限って余りよくないので、ちょっと自信がないのですけれども、どんな彼の姿も私はいつまでも見守って、背中を押してあげたいなというふうに思っております。

拙い話でしたが、御清聴ありがとうございました。(拍手)

○名須川晋委員長 塚田先生、大変有意義な講話をいただきました。どうもありがとうございました。さまざま彼の人生という岐路において、塚田先生の御指導があって今があるのだなというふうなことがよくわかりました。ありがとうございます。

それでは、これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、御意見等がありましたならお願いたします。

○城内よしひこ委員 塚田先生、どうもありがとうございました。大変勉強になりました。どうぞおかけください。

○塚田美和子参考人 はい、ありがとうございます。

○城内よしひこ委員 前回、国体前に清水先生をお招きして、こういう勉強会をさせていただいて、貴重な得点源が岩手大学にあると。それは競歩なのだというお話をされました。そのときに大変興味を持ったのですけれども、まさかこういう形で先生のお話を聞けると思っははませんでした。

そこで、ちょっとお伺いしたいのですけれども、トップアスリートが、岩手でさっき一人しかオリンピックが出ていないということでしたけれども、私も過去に周りにたくさんオリンピック選手がいる時代を過ごしたことがあって、そのときに感じたことは、やっぱり周りにオリンピック選手がいないと、その次の種は育たないのだなと、芽が出てこないのだなというのを感じました。ですので、今回岩手が抱える課題は、オリンピック選手を身近に置ける環境、高橋選手も富士通のほうに行かれたということで、清水先生も何とか岩手に残したいという話はされておったのですが、なかなかオリンピック選手を維持するためには、そういう環境というのが必要だということを出したという話でしたが、そういうことを考えたときに、岩手に何が今必要であるのかなというところをもう少し深掘りしてお話をさせていただければ、私たちの立場でも応援ができるのかなというふうに思ったのですけれども、その辺あったらお伺いしたいなというふうに思います。

○塚田美和子参考人 非常に難しい問題だと思います。確かに周りの選手がオリンピックだとかトップアスリートに囲まれると、やっぱり自分がそんな気になってくるのです。その気になってくるというか。あと、その行動の一つ一つも勉強になりますし、あと求めているレベルも変わってくるので。では、岩手に今そういう環境をつくれるかという、なかなか難しいと思うのですけれども、やはり土台をつくるまでは岩手で育てて、例えばどこかの企業で、関東でもいいのですけれども、オリンピックになってもらって、そういう選手を多く出すこと、まずそこからかなと。そうして行って、そういう雰囲気ジュニアの子たちに、こういう練習をしているとオリンピックになれるのだというふうなモデルケースをやっぱりいっぱいつくっていくことが、今例えば岩手にそういう何か実業団チームをつくりましょうといっても、なかなかそれは時間がかかったり、難しいことだと思うのですけれども、今はやっぱり足元のジュニアの子たちにそういうモデルケースをいっぱいつくって、それからできるだけ成年の、よく私たちがシニアと言うのですが、シニアの選手たちと一緒に練習させたりだとか、あとは例えば全日本の合宿なんかをどんどん誘致して見せるというの、一つのすごくいいモデルケースになるのではないかと。やっぱり本物を見せるというのは、何にもかえがたい経験値になるのではないかと。百聞は一見にしかずなのですから、そういった何か仕組みづくりというかが周りでできていけばいいのではないかなと。そして、少しずつ輩出していくとかになってくれば、あとはその子たちが戻ってきて、例えば講演活動だとか、教室を開いてくれたりだとか、もしくはそういう人たちが指導者で何か岩手でやっていくというふうな環境にはなっていくのかなと、最初から何かつくりましょうというよりは、まずは一人でも二人でも輩出して、この練習をやっていけば強くなれるのだという安心感のもとで子供たちを練習させて、どんどん上にならしていくことが私は先決かなというふうに。ただ、やっぱりこれも時間がかかる。成果が見えにくい、人の進化とか成長というのは、本当に気づいたらなっていたというように多いと思うので、なかなか見えにくいところではあるのですが、そのような形で持っていくのが、私自身は今考えられる策かなというふうには思っております。

○城内よしひこ委員 大変ありがとうございました。

あと、もう一点お伺いしたいのですけれども、私が感じてきたところなのですけれども、現役10年というのは、私もちょっと柔道やったときに先輩方からお伺いしました。心と体のバランスがちょうどとれて、持続できるのは現役10年なのだと。その中にオリンピックがうまくかみ合えば、3回入ってくる人もいるし、そうでないケースがたくさんあるわけなのですけれども、競歩という競技において現役10年、まさに心と体のバランスがとれるというのは、先生がおっしゃる息の長い競技人生について、その辺のずれというか、大ざっぱに言うとうろかなのでしょうか。その辺の競技的な違いというのはあるのかなというふうに感じながらお伺いしていたのですけれども、どんな感じでしょうか。

○塚田美和子参考人 種目の特性というのは非常にあるのかなと。競歩だとかマラソン選手なんかですと、陸上の話がメインになってしまうのですが、円熟味を帯びてからといたしますか、キャリアを積んでからのほうが勝負感が増してきたりだとかというのがあるので、競歩なんかでも20キロ競歩と50キロ競歩があるのですが、20キロ競歩は割と若手が強いのですけれども、50キロ競歩になりますと30歳前後、もしくは前回大会の世界陸上で銅メダルをとった谷井選手というのは34歳なのです。それぐらいまでも続けられる。体のメンテナンスだとか、あとはちゃんとしたビジョンづくり。今々の子たちとか、私も含めそうなのですが、どうしても年間単位でのスケジュールを考えるのですが、オリンピックレベルになると4年スパンでの計画づくりをしております。だから、毎年結果が出なくてもいいというような発想で組み込んでいるので、それがうまくいくと、きっと10年を超えた中でもできるのではないかなというふうに思っております。

なので、よく水泳選手は短命だとかと言われますが、実は水泳選手も10年は経過しているのです。始めるのがもう3歳だとか5歳から専門化してやっていますので、そこから15歳、16歳でオリンピックに出るのも、当然理由としてはわかるわけです。卓球もそうです。なので、そういったスパン、そこから先というのは、あとは体のメンテナンスだとか、長期ビジョンで、毎年やっぱり結果を出すというのは体の悲鳴も上げると思うので、そういったゆったりした気持ちで取り組んでいくというふうになってくれば、吉田沙保里選手とか伊調馨選手のような何大会も、オリンピックに3回出たら、もうそれだけで12年なわけなので、そういうロングスパンでできるのではないかなと。

今年、男子100メートルで、オリンピックで期待されていた選手が落選してしまったのです。その原因は、トレーニングを積んでいないわけではないのですが、やっぱり少し体を休ませる時期をつくらないと、本当は次の東京に向けて4年後、もう3年後になりましたが、そこには体を持っていけないというふうなことも実はあるわけです。

それから、世界水泳がこの前あって、日本は惨敗だったみたいなことも書かれていましたが、平井コーチの立場では、当然東京オリンピックは危機感を感じるというふうなことを言わざるを得ないと思うのですが、恐らく、わからないのですけれども、私の妄想ですが、もうロングスパンの中には入っていると思うのです。この時期はちょっと休憩でもいいよ

とかというようなのは、ロングスパンの中では入っていると思うので、そういうふうな長期ビジョンで考えていけば、10年以上も続けていくことは、肉体が悲鳴を上げない限りは可能ではないかなというふうには考えています。

○郷右近浩委員 本日はご講演本当にありがとうございました。先ほどの先生のお話聞いて、そしてまた城内委員のほうからの質問の中で、そのお答えの中で、一人、二人と、これから本当にオリンピックだったり、目標であったり、そうした形の選手をふやしていかなければならないという部分については、まさにそのとおりなのかなということ、話を伺っていただいていたと思います。

ただ、そこまで至るときに、やはり地道に育てていくという部分でなかなか。岩手県でも、この間国体、まず強化というような部分を含めて、いろんなことをやっています。スーパーキッズとかやられましたけれども、年齢的な部分で考えると、どうしてもやっぱり中学校までという中で、先ほどオリンピック出場選手に見るトップアスリートへの道のり、この年次表というか、これを見ても、やっぱり18歳までの間が非常に大事な時期であるといったような部分のそこの継続性というか、ここが例えば学校の部活中心というところに任せざるを得ないというか、そこに結局任せてしまうという話になってしまっていると。そうだとすると、先生がこれまで教職員として指導されてきた、またさらにはこの間国体の前からそうしたような形の強化担当ということでやってこられたことを踏まえると、そのつなぎというか、どのようにしていったらいいのかと。また、そうした中で、そのスタートラインで、やはり先生の御経験からもですけれども、指導者が例えばその競技に向いている、向いていないを含めて、いろんな形で助言であったり、ある程度強引にやってくるという面は、スーパーキッズ等でもいろんな形での種目の変更であったり、やってこられたというのは存じ上げておりますけれども、ただそうした見てくれる指導者というか、きちんとどちらかの方向性をつくってくれる、そうした指導者がいるところの環境だけではないというのも、現実に県下のそれぞれの部活であったり、またさらにはスポーツ環境の中にはあるというふうに思っているのですけれども、そうしたものだとして岩手県の中でこれから芽が出てきている、そうした方々をさらにきちんと見つけて伸ばしていったあげられる、手を差し伸べられるといったような、そうした環境づくりに、どのようなことができたらいいかというか、これはもう答えというのはなかなかいろんな形があると思いますので、先生のお考えの中であればというところで、教えていただきたいと思います。

○塚田美和子参考人 ありがとうございます。なかなか、本当にそこが一番もしかしたら難しい場面なのかなというふうに思っております。やっぱり中学校と高校のつなぎというのは非常に重要で、中学校で求める練習と高校で求める練習というのは、当然陸上競技もそうですし、いろんな競技でも違うというふうに私は思っております。それをうまくまとめ上げられるのが、本当は競技団体ではないかなと。岩手県にいろんな競技団体ありますけれども、国体種目でいったら40の競技団体がやはりそこをしっかりと連携をとって、中学校の指導者、高校の指導者が連携をとってやれるような強化体制づくりというのをもっと

強固にしていく必要はあるのではないかなというふうに思っております。

ただ、いわて国体で2位になったということで、少年選手も活躍したと。少年選手に関してはターゲットエイジとあって、中学校時代から少年種別で活躍するほうにキーポイントで着目して、そうやって成果を上げた実績が各競技団体それぞれありますので、やはりそこをそのまま終わらず、そのシステムをしっかり残していくというのをそれぞれの競技団体でやっていかなければならないと思いますし、そういった取り組みについて、岩手県の体育協会だったり、我々県だとかがやっぱり支援、サポートというか、強くやっていかなければいけないのではないかなと私個人的には思います。

やっぱりあとはネットワークです。指導者自身が自分だけで育てようだとかというふうには思わないで、私も専門は競歩でした。今ちょうど、この前日本選手権でハードルで7位に入ってくれた、これからちょっとオリンピック楽しみだなという選手、石川周平君という子がいるのですが、その子は走り高跳びとハードルをやっていたのですが、私は基礎的なことは言えたとしても、専門的な技術指導はできなかったもので、そこはもうコーチにお任せ、私はメンタル的な、あとは目標設定のコーチングをやるというふうに、もうそこは分業してやっていたので、そういう指導者自身のネットワークづくりというのもこれから強固にしていかないと、選手が埋もれてしまうきっかけ、自分が教えられないからではなくて、教えられない分、何がその子に対してできるかということを考えてあげるということも非常に重要なのではないかなというふうに思っておりますので、それぞれコーチングの立場で指導者がやらなければいけないこと、ネットワークづくり、これは中学校の指導者も同じだと思います。高校の指導者も当然同じ、私自身もやらなければいけないと思っていますし、競技団体側はいわて国体の成果でできたことを今後も残していけるような意識づくりというか、そういう体制づくりをやっぱりやっていかなければ、それこそここで終わってしまった、あそこで終わってしまった、この学校へ行ったけれども、競技できなかったというようなことが減ってくるのではないかなというふうに、最終的には競技団体が一本化して競技、やっぱりトップアスリートの強化に向けて頑張っていこうとやってくれれば、本当に私は願っておるのですが、それぞれの所属を超えて。というふうにしていけば、息の長い選手はできるのではないかなというふうに思っております。お答えになっているかわかりませんが。

○郷右近浩委員 ありがとうございます。この岩手におきましても、結局はスーパーキッズだったり、さまざまな強化の目標というのは、これはこの間のいわて国体というのが一つの目標であったと。そうだとすると、いわて国体が過ぎた中で、今度は次の目標、特にそうしたことでは2020なんていう話はそのとおりでとは思いますが、ただこれからのそうした目標に向かっていく、そうしたような思いをつくっていくということも含めて、もちろんまた県民、そうした子供たちであったり、これからスポーツにまた触れていく機会、場をつくっていくということで、いろんな角度からやることはたくさんあるというふうに思っております。さっきおっしゃったように、種目団体であったりとか、いろん

な形での連携、そうしたものを含めて、ぜひこれから頑張ってもらいたいというふうに思います。

○塚田美和子参考人 ありがとうございます。

○菅野ひろのり委員 今日はありがとうございました。私から2点質問をさせていただきたいと思いますが、まず1点目は、選手強化教職員の先生方の負担軽減ということで、県議会の中でもそうですが、教育現場でもしっかり休みをとらなければいけないということが進んでいると思うのですが、先ほどのトップアスリートへの道のりの中でも、中学校、高校の中でやっぱりしっかりやっていたらいい年齢だと思ったり、世界大会には1万時間と先ほどもおっしゃっていました。その中で、選手強化をしていくための必要な量と質の確保、現在の教育現場においても課題だと思っておりますが、どうあるべきとお考えなのかお聞かせいただきたいと思っております。

2点目でございますが、例えば中学校なんかにおいても、顧問の先生、これは自分が得意な種目ではなくてもそういった役につかなければいけないと、高校もそうだと思いますが、担当があります。そうなったときに、教え子がどんな特性があるのか、人材発掘という観点からも、非常に難しいのではないかなというふうに思っておりますが、そういった中で子供たち、適正なスポーツはこれだなというような発掘、どのような仕組みの中でやっていけばいいとお考えか、この2点を伺いたいと思っております。

○塚田美和子参考人 ありがとうございます。非常に難しい御質問でございますが、強化の時間、1万時間の法則という例え話お出ししましたけれども、種目によると思うのですが、私が答えられるのは、詳しく知っている陸上のほうでしたので、陸上でいうと中学校から毎日3時間をやってしまうと、逆に体がもたない。ちょうど成長段階ですので、むしろ中学校のときはそんなにやらないでほしいと、陸上の指導者の立場から。競技によっても、いろいろそこはさまざまあると思うのです。スポ少でやっていたりということもあると思うのですが、中学校の段階ですと、やっぱり成長の途中だということを念頭に置きながら、体に負担をかけないぐらいの時間、それから質でやっていく必要は当然あると思うので、毎日3時間とかやる必要は、種目にもよると思うのですが、私自身はそうそうないのかなと。むしろ高校から、そしてさらに上の18歳以上、体ができ上がってくるころに、いかに負荷をかけられるかで大分違ってくるのではないかなというふうに思っております。教職員の軽減云々かんぬん、盛んに問題になっておりますけれども、そのところと合致させて考えるのは、私の能力では、済みません、ちょっと足りないのですが、できないのですが、ただ選手を育てていく強化、立場の時間の負荷のかけ方というのは、やっぱり幼少期ほど時間をそんなにかけてはいけないのではないかなというふうに思います。

ただ一方で、卓球のように卓球少女、愛ちゃんなんか、家で毎日3時間ラケットを振っていたというのがありますけれども、全員が全員、申しわけないですが、トップアスリートを目指している子ばかりでもないと思っております。本当に楽しみながら運動している子もいますので、それを全部同じステージ上で考えるというのはちょっと難しい。だから、基本

は、中学校は今問題になっていることがあるのであれば、体の成長に見合った時間でやっていっていただければ当然いいと思うし、さらにそこからトップを目指したいと思う子に関してはまた別に、例えば少年団だとか何かで、恐らくもうそういう子たちはやっているのではないかなというふうにするのですけれども、そういうふうな分業化というのも非常に有用なのではないかなというふうに思っております。

二つ目のほうは、適性、専門家云々の話なのですが、中学校、高校スタートの種目であれば、私は中学校でやっていた種目はマイナスにはならないと思っております。むしろ中学校で違う種目をやっていて、いろんな動きを身につけていたことが、次のステージに行ったときに、その専門種目に生きてくると思うのです。先ほどのお話でもありましたとおり、話もしましたとおり、トップアスリートはいろんな種目の経験をして、それを競技に生かしているという反面もあるので、高校スタートの種目に関しては、私は何らその適性を見抜く云々のあれは、問題はないかなというふうに思っております。

ただし、早くから始めなければいけない競技、先ほどから言っている卓球だとかなんとかというところになりますと、恐らくそのときからもう抜き出ていると思うのです、もうその段階に行ったときには。中学校の段階でも、かなりのレベルになっていると思います。そうすると、私が知っている経験上では、県の競技団体や中体連の強化合宿に呼ばれて、そっちでちゃんと強化をされていますので、各学校にその専門の指導者がいなくても、そういう手当て、手だてというのはされている、そういうふうにカバーできている。全てが全て、全部こういうふうに行っているかといったら、そうではないかもしれませんが、ある程度それぐらいのレベルになっている子に関しては、幼少期から始めなければいけない種目に関しては、そういうふうな手だてでカバーができていないのではないかなというふうに思いますので、だから中学校のときに、本当にそこで芽が出れば一番いいのかもしれないのですけれども、私はその競技経験は無駄にはならないというふうに思っております。現に高橋英輝も、中学校ソフトテニス、小学校サッカー、その経験は、私は生きていますので、それは肉体的な部分もそうですし、メンタルだとか、スポーツマンシップの心だとか、そういうところでも生きていくというふうに私は認識しております。済みません。これぐらいの回答しかできませんが、よろしく申し上げます。

○千葉絢子副委員長 きょうは本当にありがとうございました。清水先生のフェイスブックでは、ロンドンに着いたとか、今朝の様子とかもアップされていて、頑張っているなどというふうに見ておりました。やはり塚田先生がおっしゃったように、どうしても花形の競技に私たちの目は行きがちで、実際オリンピックに出た高橋英輝さんをどれぐらいの県民の方が知っているかという、まだまだその知名度というのは低いかなというのを今日伺いして感じたところです。実際今までスポーツ選手というかアスリート、小沢みさきちゃんとかに聞いても、やはりトップアスリートの方と触れ合って、じかに指導をしてももらった経験がないと、実際はそういうアスリートでトップクラスのところにいる若手も、指導者と本人が頑張っているのですという話をいただいたこともあって、やっぱりその

トップアスリートの方の練習を間近に見るとか、直接指導していただける機会をつくるというのは、非常に大事なことなのだなというふうなことは思いました。

実際有名になるまでの支援というところが一番ネックになってくるのではないかと思うのですけれども、若い選手、芽が出始めている方を支援していく機運をどういうふうに調整していくべきかというところと、あと塚田先生御自身のことをお話しされて、先ほど冒頭で競歩のパイオニアだと思っているというふうにお話しになっていましたけれども、本当はもっと選手を育成する立場にいらっしゃりたいのではないかなというのが今日お話を聞いての私の印象なのですけれども、きちんと今までの御経験を生かしているのかどうかというようなところで、実際三ヶ田さんも同じような組織にいらして、現場に出られていない、そういうトップで活躍なさった方でありながら現場に出られていないジレンマを抱えている方は、本当はもっとたくさんいるのではないかなと思うのです。そういった人材を生かしていくためにどんなことが求められるか、その2点をお伺いしたいと思います。

○塚田美和子参考人 機運づくりですけれども、やはりスポンサーを募るというのは、なかなか本当に難しいところではあるなと思うのです。県民がまず何かできる、支援ができる体制というのが、皆さん御存じだと思うのですが、岩手県体育協会に賛助会というのがあります、御存じないですか。賛助会というのがあります、そこに一般県民、市民の方々も募金みたいな感じできるのです。それは、岩手県の体育スポーツの支援が、例えば競技団体のサポートとかにうまく使えたりというのもあるので、やっぱりそういうのがまだ知れ渡っていないというところもあると思うので、まずそういう足元のところからぜひ広めていって、それこそいろんなところでスポーツ基金みたいなのをやっています。そういうものをいろんなところに働きかけをしながらやっていって、今はやっぱり県の補助金だけに頼っている部分も、日本もそうなのですけれども、国の補助金に頼って、JOCなんかもやっているのですが、それ以外のところの財源確保というのをやっぱり皆さんに周知して、あとはどんどんこういうふうなアスリート、岩手にこういうアスリートいますよというのを発信していって、そしてそれをいろんなところでいろんな住民の方々と、県民の方々とシェアしながらいくと、応援したいなというようなことが、本当に草の根的だと思うのです。別にアイドル化させる必要もないと思うのですが、そういう取り組みだとかをやっぱり地道に、やっていく必要があるのではないかなというふうに思っております。学校を初め、それぞれのコミュニティーを使いながらやっていくということが大事ではないかなというふうに思います。

あと、私が今ここにいるジレンマではないかというふうなことで、今上司がいるのに何としゃべったらいいのかなというふうにすごく思っておりますが、私自身は今御理解をいただきながら、日本陸上競技連盟のほうの指導のほうをまず優先、優先かどうかわかりませんが、やらせていただいております。ただ、やっぱり私自身今思うのは、今は高橋英輝がオリンピックになったので、こうやってお話をさせていただいておりますが、それでも私自身はやっぱり彼がただ単に能力があったからではないかとかというふうな自問自

答はいつもあります。だから、もう一人、本当はできるならばオリンピックをやっぱり輩出したいとか、育ててみたいとか、本当に自分の、選手とはまた違った立場で力を試していきたいなというふうには思っております。

とはいえども、今の職でもそうやってスーパーキッズとかにも携わらせていただいています。保護者やキッズのみんなに、トップアスリートを目指すにはどうしていかなければいけないかというような経験談をもとにお話をさせていただく機会もあつたりとかはあるので、そういったコーチングの場面というのは今でもありますが、やっぱりジャージーをはいて指導できれば一番いいのかなというふうに思っております。

私自身教員を目指したきっかけは、体育を教えたいからではなくて、実は体育は苦手なのですけれども、人の人生の後押しをしたくて、背中を押したくて、教員になったものでしたから、競歩というのは一つの手段ですが、そうやって人の人生に何か関わられるような仕事ができると思ったらいいなと、今は今の職でやることをいっぱい一生懸命やっていたいなというふうに思っております。以上です。

○吉田敬子委員 きょうはありがとうございました。2点お伺いしたいのですが、先日委員会の視察で北上市に行ったときに、文科省のモデルの事業で、小学校の体育の授業に、総合型スポーツクラブの方に来ていただいて体育の授業をしているというようなことが、過去にあったという事例として、先ほど菅野委員から教職員の多忙化解消にもなったりだとか、あとは先ほど先生の資料の中に、12歳から18歳までの時期のトレーニングが非常に重要だであったのですけれども、実際にはやっぱりその前の段階で、ある程度そういったスポーツにたくさんふれている機会が必要なのかなと思うのも含めて、例えば小学校でそういった外部の方にもっと、やっぱり体育の先生、特に小学校は必ずしもそれを得意とする先生ではない中で、そういったことをやるということは、すごくいい一つのモデルなのかなと感じたのですけれども、その点についてお伺いしたいことと、あともう一つは先日女性スポーツ学、全国でいろいろやっているもの、盛岡で去年やったものに参加させていただいて、有森裕子選手もいらっしやって有森さんの講座に参加させていただいたときに、先生は女性ですから、女性アスリート、女性と分けるわけではないのですけれども、私はちょうど思春期のときに体が変わる中で、やっぱり女性は大事にしなければいけないところもあるというようなことがその講座の中でお話しされていた中で、先生も高校のほうでやられている中で大事にされていることがまだあると思いますけれども、それと県内の学校でそういったことで一様に教育されているか、その感触をまず伺いたいと思います。お願いします。

○塚田美和子参考人 ありがとうございます。まず、一つ目の御質問について、地域スポーツとの連携ということで、私は非常にいいことではというふうに思っております。小学校4年生、5年生の時期という、10歳前後の時期というのは、ゴールデンエージというふうな時期でもありまして、発育、発達の段階でいろんな技術を習得、体に身につけることができる、即座の習得と言われる、運動、スポーツ学ではそういうふうに使われている時

期ですので、一つの種目しかやらないというよりはいろんな動きを身につけると、それが専門化したときに生きてくると思いますので、そうやっていろんな種目を経験させる場を提供させてあげるというのは、小学校には非常に重要ではないかなというふうに考えております。

それからあと、女性スポーツというふうなことで、女子選手がさまざま活躍する中で、やはりそれに対してJOCのお話とか調査結果でもあったのです。やっぱり女性指導者の割合が少ないと。理想は女性、男性問わず、人間としての指導ができれば、一つの人間という指導ができれば一番いいのですが、ただやはり体の構造上違ってしますので、ナーバスになりやすい部分については、女性のほうが聞きやすかったりというふうなこともあろうかと思えます。

学校現場では、やはり保健体育の保健の中で第二次成長とかの部分については触れておるのですが、部活動まで全部の女子部に女性の先生を顧問として配置できるかということ、なかなかそれは物理上難しいと思えますが、ただ競技団体のほうでは、できる限り女性スタッフの起用というのは一生懸命やっているようには、以前に比べたらあると思えます。ただ、やはりまだ少ないというのは、私自身現状で、この御時世ですので、女性指導者、これは日本陸上競技連盟もそうなのですが、海外遠征なんかでやっぱり女子スタッフが欲しいということでオファーが来るのです。ただ、いかんせん人が少ないがために偏ってくるので、私自身もちょっと肉体的にも疲れる部分も正直ございますので、やっぱりこれからは女性指導者も増やしていく取り組みをしていく必要はあるのではないかなと。ライフステージで出産、それから育児とか、いろいろあるのですが、当然男性の協力も必要だと思うのですが、一回退いてしまうとどうしても尻込みしてしまう。それから、今現在の技術に合わないのではないかとこの部分のメンタル的なこともあるかと思えますので、やっぱりそういうケアだとか、そういう学ぶ機会はいっぱい、昨年もそういう女性スポーツのああいう会議のようなものももっとも身近になれば、女性指導者がスポーツにかかわりやすい環境ができてくるのではないかなと。そうすると、高校にいなくても身近にそういう指導者が競技団体にいっぱいいるようになると、ケアができるのではないかなと私自身は思っております。以上です。

○名須川晋委員長 まだまだ御質問されたい方もいらっしゃると思えますけれども、時間でございますので、あとは個人的に皆さんお伺いをしていただければというふうに思います。

本日の調査は、これをもって終了いたします。

塚田様におかれましては、本日はお忙しいところ誠にありがとうございました。トップアスリートを育てるための具体的な、また貴重なお話をいただきまして、大変参考となりました。それでは、拍手でお送りをしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

○塚田美和子参考人 本日はありがとうございました。

○名須川晋委員長 次に、9月に予定されております次回の当委員会の調査事項について

であります。御意見等がありますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもちまして、本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。